

学力研の広場

「やまなし」はきわめて短いものであり、事件らしい事件もない、いわば人目をひかない作品であるため、片隅にひっそり身をひそめている——といった感がしないでもなかった。

しかし、私は、「やまなし」は賢治の世界観が、いわば散文詩の形に結晶したともいえる珠玉の短篇ではないかと考えてきた。賢治を代表する作品の一つとして、ぜひ教科書に掲載すべきであると主張し、さいわい十数年前に光村図書出版の教科書教材として採用となった。

とはいえ、現場の教師の反応は「否定」的であった。「イメージがあざやかで生徒の受けも悪くないが、授業となると、何をどうやっていいか、わからない。」いざ、教材研究となると疑問が頻出する。教師はもちろん、子どもたちも、(いや、研究者のあいだでも) たとえば次のような疑問が出てくる。

まず冒頭の蟹の子供らの会話にくりかえされる〈クラムボン〉というのは、いったい何か。これは後半に出てくる〈イサド〉同様、賢治の造語であるが、その「正体」がわからない。ミズスマシではないか。アメンボウでは、いや、プランクトンかも知れない。とにかく生物の一種であろうというわけだ。一方、これは水の泡のことではないか、という説もある。その他、あれこれと仮説が出されるが、考えれば考えるほど、正体不明。

※西郷竹彦『賢治「やまなし」の世界』(2009.7 黎明書房)より。

CONTENTS

◇特集 難教材への向き合い方・教え方◇

算数「時刻と時間」の教え方(2年生、3年生)	鈴木基久	2
総合的な学習の時間	加藤英介	4
難教材もさかのぼり、繰り返し	宮本 哲	6
難教材『割合』を教えよう	根無信行	8
「できる」を重視した「くり上がり・くり下がり」の指導	吉田雅直	10
難教材への向き合い方・教え方～1年生の説明文教材～	岸本ひとみ	12

◇連載◇

「どの子ども伸ばす」を本気で考える④「意欲格差」に負けない! 公立小学校へ	岡本美穂	14
考える力をつけるための授業の組み立て方⑥ 最悪な状況を乗り切るために	荒井賢一	16
社会科(歴史) 授業力アップ講座31 社会科における知識とは	深澤英雄	18

第19期先生のための学校・第1回の報告	荒井賢一	20
局長・常任委員長だより		21
学力研カレンダー		22

算数「時刻と時間」の教え方（2年生、3年生）

鈴木基久

私が教えるのに苦労している算数の単元に「時刻と時間」がある。

「時計」の学習は、1年生で時刻を読み、2年生で午前、午後、正午、1日 \parallel 24時間を学習し、3年生で1分 \parallel 60秒を学習する。

「時刻と時間」が分かるための前提として、次の2つがある。

- ・時刻と時間を気にする規則正しい生活をしている。家庭での会話に時刻や時間がよく使われている。
- ・家庭にアナログ時計があり、日常的に見ている。

「時刻と時間」の学習は、算数の教科書に載っているが、そもそも本当に算数なのかと言いたい気持ちをもっていた時期もある。それは、日常生活で身に付くものと思っていたか

らだ。時刻を全く気にしないような生活をしている子にとっては、そもそも時刻や時間を使わないので、学ぶ意義を感じられない。使わないことは身に付かない。この前提については、機会があれば保護者会などで伝えた方がよいと思っている。

大人が気付かないところで、「時刻と時間」の学習を難しくしている落とし穴があるので2つ紹介したい。

①日常生活では「時刻」のことを「時間」と言っている場合がある。

授業では、「今この瞬間のことを時刻、○時○分から●時●分までの間のことを時間という。」と教える。しかし、日常生活では「今の時間、教えて。」のように「時刻」のことを「時間」と言うことが多い。そのためか、

時刻と時間の違いが分からないままの子がいる。「午前9時35分」が正解なのに、「午前9時35分間」と答えてしまう子、時間に午前や午後をつけてしまう「午前30分間」のような誤答も見られた。

②0分前、0分後の表現

「過去を振り返らず、未来を向いていこう。」というような表現では、時間は過去から未来に進んでいくことになっている。つまり、未来が前で、過去が後ろということになる。しかし、3日前、1週間後となると過去が前で未来が後になり、前後が逆になっている。これは、今井むつみ著『算数文章題が解けない子どもたち』に紹介されていたものだ。日本語のこのような表現が、子どもたちのつまずきを生んでいるのではないかと指摘されていた。

2年生で、私がどのように教えたのかを4つ紹介したい。

①時計の時刻を読めるように復習

1年生で学習した時計の時刻が読めなければ、2年生や3年生の学習に取り組めない。そのために「パワーアップ読み上げ計算ワークシート」（志水廣著）の時計のページで繰り返し練習して、正しい時刻が読めるようにする。単元の学習が始まる少し前から、さかのぼり指導として取り組むとよいと思う。



②時計の模型を動かす

授業では、時計の模型を一人ずつに持たせて、問題を出し、時計で答えさせる。時計の模型を動かして、時刻と時間の違いが理解できるようにする。例えば、「今は9時20分です。そこから35分間勉強しました。今の時刻は何時何分でしょう。」とい

う問題であれば、まず時計を9時20分にする。次に長針を35分間動かして、答えが9時55分になることを確かめる。このように、時間を理解するには、時計を動かす経験が必要だと思う。

③「時計かるた」で楽しく繰り返し返す。

昨年度、勤務校の日課表に合わせた「時計かるた」を作成した。「時計かるた」のよいところは、友達と楽しく繰り返しできるところである。

このかるたのポイントは、自校の日課表に合わせているところである。「3時間目が始まるよ。午前10時20分。」を聞いて時計のイラストが10時20分の札を取るのである。自分の生活と時刻が結びついていれば、「5時間目が始まるよ。」と聞いただけで時刻が分かり、素早く札を取れるはずである。また、読み手が「10時50分の30分前の時刻」と工夫して読めば、2年生や3年生の学習内容を反映したかるた遊びにすることもできる。

			10時だよ← ぎょうかん 業間は← 外で元気に← あそぼうよ←	3時間目が← はじまるよ← 10時20分←	3時間目が← おわるよ← 11時5分←
			4時間目が← はじまるよ← 11時15分←	きゅう食の← メニューは← 何かな← 正午 12時←	きゅう食の← かたづけできた？← 昼休みだよ← 12時40分←

④ 「時間どりじゃんけん」

今井むつみ著『学力喪失』の243ページに、時間概念の記号接地の実践例として「時間どりじゃんけん」が示されていた。興味をもったので、算数科の備品として「パターンブロック」を購入してもらい、

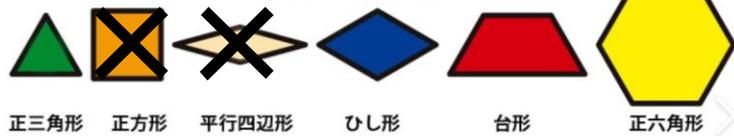
2年生で実践してみた。

パターンブロックは、下の図のような積み木である。

「時間どりじゃんけん」では、全員に次のブロックを分ける。六角形1つ、台形2つ、ひし形3つ、正三角形6つ。(平行四辺形と正方形は使わない。)

じゃんけんをするときは、台形とひし形と正三角形を1つずつ持ち、友達とじゃんけんする。パーで勝つと台形、チヨキで勝つとひし形、グーで勝つと正三角形がもらえる。負けた人は、取られたのと同じブロック

パターンブロックは6種類：1辺は約2.5cm



正三角形 正方形 平行四辺形 ひし形 台形 正六角形

を補ってじゃんけんを続ける。負け続けると必要なブロックがなくなるので、六角形を両替してじゃんけんを続ける。

ある程度たったらじゃんけんを終えて、自分のブロックを集計する。

このとき、六角形が60分、台形が30分、ひし形が20分、正三角形が10分を表しているとして、獲得した時間の合計が、何時間何分になるのかを子どもたちに考えさせるのである。

ある子は六角形の上にブロックを積み上げ始めた。何段あるのか数えていた。(写真 左)

別の子は、ブロックを六角形に並べ始めた。そのうちに六角形の数が時間を表していることに気付く子が増えてきた。(写真 右)

「時間どりじゃんけん」は、ルールが簡単なので誰でも参加できると、目に見えない時間がブロックにより可視化できること、楽しく繰り返し取り組むことで時間の両替など

を通して1時間が60分であることを実感できること、などのよさがあると感じた。7月に1度取り組んだのだが、9月に「ブロックのじゃんけんをまたやりたい。」という声がかれた。

今回紹介したものは、子どもたちの理解を助けるものになると考えているが、「時刻と時間」を子どもたちが理解できるための方法を今後も模索していきたい。



総合的な学習の時間

加藤 英介

はじめに

今年度は総合専科として、3年生から6年生の約20クラスを担当している。1時間は専科が担当し、もう1時間は担任がしている。それぞれが別のことをしているわけではない。専科が立てた年間計画に沿って、各担任と連携しながら進めていく。このようなことは県内でも珍しい。校内でも初めての取り組みである。その背景には、大きく2つの要因がある。1つは、昨年度まで、総合的な学習の時間を十分に生かされていなかったことにある。出前授業や社会見学、修学旅行などの調べたことをまとめて発表して終わってしまったり、他の行事に時間を消化したりと学年主任の意向に大きく左右されていたことにある。2つ目は、教職員の授業力アップがしなくてはできないことである。学級担任が固定されることよって子どもたちの学びも固定されてしまう場合がある。また、クラスがあるため、授業を見学したいと思っても安全面上離れ

ることが難しく、研鑽を積むことにもある種の抵抗感もある。それらを解消するためフリーで動ける時間を意図的に増やし、授業改革や教職員のアップデートを図ろうとしている。今回は「総合的な学習の時間」という教材が、そもそもないという難しさの中、どのように向き合っているかについて三年生の実践を紹介する。

大治のくらし（四月）

3年生は「大治のくらしーわたしたち、大治探検隊ー」とテーマを設けて、社会の学習とかけ合わせながら進めている。4月、校区探検に何気なく出かける中で、田畑や住宅地、お店や生き物など子どもたちは多くの気付きをする。ある子は「あっ！しそだ！」という声から「はるちゃんだ！」と大治町のマスコットキャラクターと結びつけた。さらに「大治町で有名なんだよ！」という声も聞こえてきた。そこで、学校にもどってまとめているときに「大治町の有

名なものか、しそっていついていたけど、そうなの？そのことを隣の町や愛知県の人知っているのかな。これでいいのかな。みんなはどうしたい？」と聞くと「調べたい！広めたい！育てたい！」という声があがった。「どうやって調べるの？どのように広げるの？」と尋ねると「教科書、本、資料集で調べて、キヤッチコピーで広める」などの意見が出た。また「今から育てたい！」という子もいたため、学校で余っていた赤しその種を学年の畑にすぐにばらまいた。

二ヶ月後・・・（七月）

紫蘇について調べたことは、チラシやキヤッチコピーで宣伝したり、新聞や報告文にまとめたりした。「つくりたいけど、どうやってかいたらよいかわからない」と教師に相談に来た子には「そういうときは教科書を使うといいかも」と伝えた。そして、国語や社会、資料集などあらゆるものを参考にして書き上げていた。つくったものは校内に掲示した。しかし「地域には広まっていない」という声から、近くのJAやSPAーに飾って広めるため、掲示するもの

をもつてお店に伺うことにした。「JAの朝市でよければ広めてください」と子どもたちが赤しそにかけの思いを伝え終えた。広める活動は、ある程度進められていたが、学年の畑にまいた赤しその種は一つも芽が出ていなかった。(この理由についてはまだどこかでお話します)「どうして、出ていないのかな?」と聞くと「耕していない、水をあげていない、適当にまいた、種を踏まれた、愛情がない」などの意見があった。

「もし、種まきのときに戻れるとしたら種を植える前にどうしますか?」と聞くと「ネットですべてからまく」「JAの人に聞く」という大きく分けると2つの意見にわかれた。「どちらが正確な情報なのだろうか?」と尋ねると「JA」と一致した。理由は「地域の人だから」や「育てるプロだから」という意見だった。「一学期はこれで終わってしまうけど、二学期は何をしたいか考えておいてね」と終えた。

小松菜・ほうれん草を広め隊(九月)

二学期の最初の授業では、次のような質問をした。

・総合のテーマは?

・一学期に取り組んだことは?

・赤しそを広めることはできたかな?

・大治町の特産物は?

・小松菜とほうれん草はどうする?

・広めるためにどんなことをしたい?

・まずは計画を立てよう。

・今日の振り返りを書こう。

子どもたちの「やりたい」という意欲を引き出すために、子どものつぶやきや反応を見ながら、テンポよく進めた。

おわりに

今回は三年生の「大治のくらし」をテーマとする実践を紹介した。総合の学習で大切にしたいことは、子どもたちの「調べたい、広めたい」という純粹な探究心である。また、うまくいかない経験をどれだけできるかということも大切にしている。今回であれば、赤しそ栽培の失敗である。この失敗は、子どもたちに原因を考えさせ、「次は専門家であるJAの人に聞く」という、次への行動へと繋がった。これは、単なる知識の習得に留まらない、本物の「探究の

サイクル」が生まれた瞬間と言える。教師が成功体験ばかりをさせるのではなく、うまくいかなくて悔しい子どもたちの思いに寄り添い、問いかけることで思考を深め、主体性を引き出すファシリテーターの役割をいかにするかが求められている。

一学期の貴重な失敗経験を土台に、二期は小松菜とほうれん草をテーマとした、より計画的で地域と深く連携した活動へと発展していくだろう。この一連のプロセスは、子どもたちが試行錯誤しながら自ら学びを深めていく、総合的な学習の時間の本来あるべき姿を示している。

しかしながら、自分自身も含め「総合」の授業をどのようにしたらよいかわからない先生も多いのではないだろうか。他教科ではすることのできない活動ができたり、普段は会うことのできない人に会えたりとさまざまなチャンスをつくることができるのが、総合的な学習の時間の魅力である。今回は三年生を中心に話をしたが、機会があれば、他学年の取組や学校全体のカリキュラム、活動についても伝えていきたいと思う。

難教材もさかのぼり、繰り返し

大阪教育サークルはやし 宮本哲

「学びの基本」

やさしい教材と同様、難しい教材も「さかのぼり学習と繰り返し学習」を徹底的にしていくなかで子どもたちは、知識をつけていくと思います。

最近、タブレットを使用して効率よく知識を得ることが流行りになっているように感じますが、知識をつけていくには、何度も繰り返しすることを毎日行った方が確実に力をつけていくと思います。

人間の脳も何度も同じことを繰り返しながら進化してきました。だから子どもたちにどんな教材を教える時も「さかのぼり学習と繰り返し学習」を意識して取り組んでいけば、必ず子どもたち力をつけていくはず。

では、どんな時に「さかのぼり学習と繰り返し学習」をしていくのでしょうか？私を考えるには、大きく分けて2つあります。

まず、繰り返し学習は、新しい教材で学んだ知識を確実に修得させるために行います。

次に、さかのぼり学習は、今から教える教材を理解するのに、この知識が身につけていなければ、理解できない時にまず、さかのぼり学習をしてからその教材に入っていきます。

では、いくつか私の実践を紹介していきます。

【二年生 算数 「時計」】

今までに一回だけ二年生を担当したことがあります。その時、算数の時計の単元がありました。この単元の配当時数は数時間だけです。けれどもしっかりテストもあります。

それまでの学習と同様、私なりに、しっかりと教え、単元の学習を終えました。その後テストをした結果は、すごくひどい点

数がほとんどでした。算数のテストの点数がこんなにひどかったのは、先にも後にもこれが一番でした。その当時のクラスの子たちには本当に申し訳ないと思っています。当時その学年は四クラスあったのですがどのクラスも私のクラスの点数とそんなに変わりませんでした。

そこで改善策として、この時計の単元は、繰り返し学習をして、全員が時間を読めるようになってからテストをするということでした。

方法としては、まず算数の時間に私が黒板に日付を書き終わった時、子どもたちは「〇時〇分」とノートに書くことにします。

その後、子どもに答えてもらい答えがあつていれば、赤鉛筆で丸付けをします。授業後の子どもたちのノートを見れば、誰が時刻を分かっている、誰が分かっているのかが分かります。全員が時刻を理解するまでしていきます。

次に全員が時刻をしっかりと読めるようになった後、「ノートに書いた時刻の〇〇分後には、〇時〇分ですか。」や「ノートに書いた時刻の〇〇分前は、〇時〇分ですか。」、「ノ

ノートに書いた時刻の〇〇分後は、午前(午後)〇時〇分ですか。」の質問をして、ノートに書いてもらいます。これも子どもたちに答えてもらい答えがあつていれば、赤鉛筆で丸付けをします。これで二つとも合っていれば赤丸が二個になります。

最後に授業中に「今から〇〇分後に給食時間は始まりますか。」これは給食のおいしいそうなおいが漂ってきた時に質問します。この質問で給食が待ち遠しくなるので、よく食べます。他にも「授業が始まってから〇〇分経つていますか。」などこれらの質問をして、答えがあつていれば、赤鉛筆で丸をしてもらいます。これで三つとも合っていれば赤丸が三個になります。三個になつた人は、花丸を横に書きます。全員のノートの花丸が続くようになったらテストをします。

この単元は、学んだことを繰り返してできるようにしてからテストをするパターンです。このパターンには、時計の単元以外に公倍数、公約数、最大公約数。最小公倍数、都道府県名、歴史人物、ローマ字などできると思います。

次は、さかのぼり学習のパターンを紹介します。

【六年生 国語 「やまなし」】

私が「やまなし」を一番最初に子どもたちに教えたのは、今から二十五年ぐらい前になります。その時は、「クラムボンの正体は何ですか？」という発問から子どもたちは特に根拠もなく思いつきで発言した授業場面くらいしか覚えていません。この時の子どもたちにも申し訳ないと思っています。

(この時の教え子が小学校の先生になっているので今度会った時に「やまなし」の授業で覚えていることを聞いてみたいと思います。)

「やまなし」は、「海のいのち」や「大造じいさんとガン」「ごんぎつね」などのように中心人物が始めと終わりで変容する物語ではありません。そのように読んでしまふと中心人物って誰?始めと終わりで何が変容したの?ってなってしまう。ですから「やまなし」を読む前に「対比」の読み方を教えておかなければなりません。

対比を使って読み進めていく物語として四年生の「一つの花」があります。「やまなし」

の学習前に簡単に復習し、対比を使って読み進める方法を再度確認しておきます。「一つの花」は、戦争前と戦争後を対比しながら読みを深めていきます。子どもたちからは、お父さんがいるとこない、花が一つとたくさんなど多くの対比関係を見つめます。そしてその中でどの対比が一番大切かを選択させて理由を書き、交流します。その後、対比を使って主題を考えていきます。

その他にも子どもたちが知っているイソップ童話や昔話も対比を使って読み進めても面白いと思います。「ウサギとカメ」「アリとキリギリス」「浦島太郎」「こぶとりじいさん」など先ほどと同じように一番大切な対比を選択した後、交流し、主題を考えていく学習ができると思います。

時間があまりない時は、詩を使って対比の復習するのもいいと思います。金子みすゞの「大漁」や「わたしと小鳥とすずと」などは使えます。

このようにさかのぼった教材を使って対比を学び直すことで難教材の「やまなし」も読み解くことができます。

難教材『割合』を教えよう

大阪 根無 信行

私たち教師が、がんばって教えたと思っても、子どもたちには難しい、引っかけたてしまう、結果、テストでも正答率が低く、子どもたちにとってだけでなく、教師にとっても教えるのが難しいという印象として残っている、そんなものを難教材と考えて、それについて、どう教えるのか、自分が教えているときを思い出しながらお伝えしたいと思います。

単元は5年生算数の、『割合』です。割合の教材を子どもたちが難しいと感じること、教師が教えることの難しさには、二つあると思います。一つは、文章問題の中に出てくる数字が、比べる量・もとにする量・割合の、どの数にあたるのか、その3つがどんな関係にあるのか、子どもたちが見抜けないまま単元が進んでいくこと、もう一つは、わり算の習熟不足です。割合そのものの理解までの難しさと、いわゆるわり算の難しさの二点が重なって学習が進むので、一筋縄ではいかない教材になっているのではないかと思っています。

一、割合のとらえかた

(考え方のステップ1)

割合は、「比べる量がもとにする量の何倍になっているかを考えて解答に活かす問題」だと捉えて教えています。

割合を学習するときの用語に、「比べる量(比べられる量・東京書籍の表記)・もとにする量・割合」の3つがあります。それに付随して、百分率・歩合の単位が用語として登場してきます。子どもたちには、この用語のとらえ方を解説します。式を作る3つの語句と、割合を別の形で表した2つの語句「百分率や歩合」があり、「割合」の単位変換なので、3つの語句とは分けて考えるよう、その中で出てくる割合を別の単位で、例えばmをcmで表したりしているだけです、と教えています。

次に、「割合」は、AはBの何倍か、を表している答えなのだ、というとらえ方を伝えます。

比べる量・もとにする量 \parallel 割合

という形を公式として覚えるようにできて

いますが、そのうえで、AはBの何倍か、 $A \div B \parallel \text{〇(倍)}$ という式と照らし合わせます。

$A \div B = \text{〇(倍)}$	← 単位は省略される
$\text{比べる量} \div \text{もとにする量} = \text{割合(倍)}$	
$10 \div 5 = 2(\text{倍})$	どっちも 割合(倍)
$5 \div 10 = 0.5(\text{倍})$	

比べる量は、もとにする量の何倍なのか、を答えとして求めるのが割合の算出なので、割合の問題の立式を、AはBの何倍なのかを求めると同じ、わり算の商で求められるととらえるようになります。

比べる量がもとにする量を超えていると、

割合は1倍「100%」を超えるし、比べる量の方が小さいと、割合は1より小さくなる(100%未満)ことで、百分率との関係もつかめるようにしています。百分率は、シンプルな数字(何倍か)の割合が出たあとで、単位変換の作業をするだけというふうに、です。

また、何倍かを調べる問題なので、割られる数と割る数(比べる量ともとにする量)の単位は同じ、ということにも注目します。例えば、5円は10円の何倍ですか、というもので、5個は10円の何倍ですか、という問題の問われ方はしません。

このとらえ方ができれば、比べる量は、もとにする量を“何倍かした”ものなので、もとにする量に、割合(百分率でない数字)をかければよいのだ、という理解につながります。

あとは、どっちをどっちで割るか(どちらが比べる量で、どちらがもとにする量なのか)が明示されていない問題)が、子どもたちにとっては難しいと感じるようです。

(考え方のステップ2)

比べる量・もとにする量 \parallel 割合を公式として覚えたあとに、次は、「比べる量」と「もとにする量」の見分けについて、「も

とにする量」に注目して、どんな数なのかをとらえます。

その方法を(文章の読解的にですが)教えてくれたのは、20年程前に同学年を組んだ先生でした。「そう言われたら見つけられるようになった」と、子どもたちが言ったというとらえ方です。それは、『もとにする量とは、「もとも」とあった、または決められていて、変わらない量」ととらえる』という説明です。

イメージです↓例えば、教科書の初めのほうに出てくる、「定員に対する希望者の割合を求めましょう」という問題では、希望者は変化するが、定員はもともとも決まっています。今は変更できない、なので定員がもとにする量」と考えたり、「定員の〇%云々という問題も、定価がもともとの数値なので、もとにする量」ととらえたりできます。(陸地面積における森林面積の割合や、クラスで虫歯のある人の割合という問題も、「もとも」とあった陸地の面積や、もともとしたクラスの人数は?急には変わらないよね。でも虫歯の人は何日かすると増えたり治して減ったりして変わるかも。」という、とらえることができいました。)

単純ではないと思いますが、もとにする

量 \parallel 変わらない量、比べる量 \parallel 変わる(変わった)量、と考えるのです。

こういった割合の学習に出てくる言葉を理解して、立式につながられるようにしておくことで、割合という問題が問うていることに答える形に慣れることができると思います。そう願って、割合の教材は教えています。

二、わり算

割合の単元は、かけ算とわり算の双方向のとらえ方で進みます。そのうち、どちらかというわり算を扱う方で、まちがいが増えます。

(100%を超えない時の割合は、1より小さい数が商なので)特にそれには、「計算力」と「数量感覚」の弱さに原因があると思います。

私は、割合の学習に入る前に、わり算の筆算や、概数のさかのぼり学習を行うようにしています。割合の意味理解と、わり算の復習を授業の中で同時に進めるのは大変です。子どもたちの計算力に不安があるなら、単元の前に、少しずつ、基礎計算の練習を取り入れてみてはいかがでしょうか。

「できる」を重視した「くり上がり・くり下がり」の指導

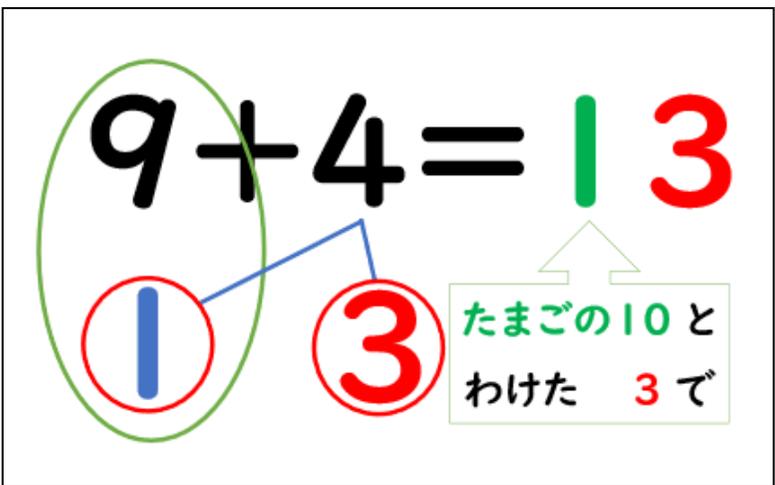
大阪 吉田雅直

「くり上がり」と「くり下がり」の指導

一年生の算数における「難教材」といえば、やはり、たし算の「くり上がり」とひき算の「くり下がり」ではないでしょうか。一学期にたし算とひき算を習ったばかりの一年生の子どもたちにとっては、全身全霊をかけて取り組むべき一年生の算数における最難関の課題であると言っても過言ではありません。

しかも、ここでつまずいてしまうと、二年生でたし算とひき算の筆算、三年生でかけ算の筆算、四年生でわり算の筆算と、計算への苦手意識をずっと引きずることになってしまい、算数がどんどんきらいになってしまいます。なんとしてでも、一年生の間に、どの子も「くり上がり・くり下がり」が自力で「できる」ようにし、最終的には「習熟」まで引き上げておいてあげたいものです。

「十のたまごとさくらんぼ」



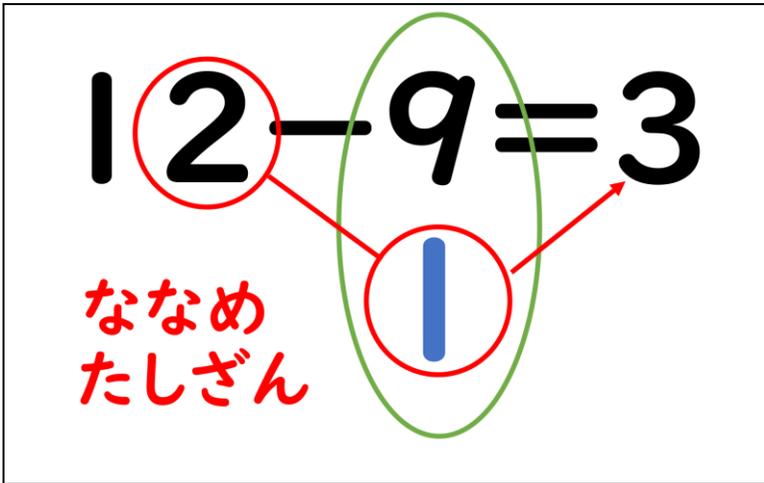
学力研では、くり上がりは「十のたまごとさくらんぼ」、くり下がりも「十のたまごとなめたし算」という方法で指導してきました。ここでは、その合理性と有効性について再確認するとともに、習熟の方法についても紹介したいと思います。

くり上がりの「十のたまごとさくらんぼ」の最大の利点は「十までの数の合成と分解」さえできれば、どの子もくり上がりの計算が「できる」ようになるという点にあります。一年生の算数の教科書には、くり上がりの計算のいろいろな方法が示されており、いろいろな考え方ができることが推奨されているように思われます。もちろん、それも大切な算数の力なのですが、私は、まずは、最もシンプルでわかりやすい方法を教え、どの子もくり上がりの計算が「できる」ようにしてあげることが大切だと考えています。いろいろな方法が「わかる」ことも大切ですが、「できる」ようになってから「わかる」こともあるし、まずは、どの子にも「できた」という喜びを感じさせ、自信をつけさせたいからです。

そのためには、くり上がりの学習に入るまでに、「いくつといくつ」を徹底的に習熟させて

ます。難教材に立ち向かうには、必要となるスキルの習熟度を高め、スタートラインをできるだけそろえておくことが、学力格差の解消につながると思っています。

「十のたまごとなめたし算」



くり上がりを「十のたまごとさくらんぼ」で指導することのよさは、同じ「十のたまご」を使って、くり下がりの指導もできるということにあります。くり下がりには「十のたまごとなめたし算」という方法で指導しますが、くり上がりで「十のたまご」に慣れ親しんできた子どもたちは、「また十のたまごが出てきた！」と、それだけで安心して、新しい課題に自信を持って取り組むことができるのです。実際、「ななめたし算」によるくり下がり、くり上がりの「さくらんぼ」より簡単だと、子どもたちにも好評です。

このように、子どもたちにとってハードルの高い教材ほど、いかにシンプルに、わかりやすく、最小限の努力で最大限の効果を引き出すことができるかということを考えるべきなのではないでしょうか。

「十のたまご」でくり上がり・くり下がりが「できる」ようになっても、そのままでは、三学期にはすっかり忘れてしまいます。大切なのは、「できる」から「習熟」へと子どもたちの計算力を計画的に高めてあげることです。「習熟」とは、「7はあと3で10になるから

…」と考えなくても、「7」と5を見た瞬間に頭に「12がぱつと浮かぶ状態のことです。つまり「7」と「5」と「12」がしっかりと結びついた形で脳にインプットされていて、いつでも、自由自在にアウトプットできる状態が「習熟」なのです。たし算とひき算は、算数における最も基本的な「道具」のひとつであり、より高度な計算や複雑な思考を支える基盤となるスキルです。それを一年生の間に「習熟」まで高めておくことは決定的に重要だと考えています。そこで、私は「いくつといくつ」のくり上がりバージョンに取り組むことにしています。これは、「1」から「9」までの数の合成と分解をリズムに合わせて唱えるというものです。授業の始めにみんなで唱えるだけで、くり上がり・くり下がりの習熟につながります。高学年でも、ぱつと出ない子が結構いるので、どの学年でも有効だと感じています。

このように、難教材を指導するポイントは、①必要なスキルを習熟させてスタートラインをそろえておく。②できるだけシンプルでどの子ども「できる」わかりやすい方法で指導する。そして③「できる」から「習熟」を目指すということにあるのではないのでしょうか。

難教材への向き合い方・教え方

～1年生の説明文教材～

加印 いろえんぴつ 岸本 ひとみ

説明文の授業は難しい

1学期は、全員が正しく音読するのが精いっぱい。なにしろ、ひらがなの指導だけでも、入学後2か月ぐらいはかかるのですから。読んだり、書いたり、言葉あつめをしたり、と言語事項の指導ばかりになってしまいます。ただ、楽しい物語文もいくつかは入っていますので、挿絵をもとに、内容についてもふくらませることはできます。一方、説明文の指導となると、あの短い文章ですから、必要な要素を押さえていくだけでは、あまり楽しくない授業展開になってしまいます。そして、典型例として示されている「○○ずかんをつくってみましょう。」をやってみましょう、また文字の修得がおぼつかない子どもたちには、ちんぷんかんぷんです。

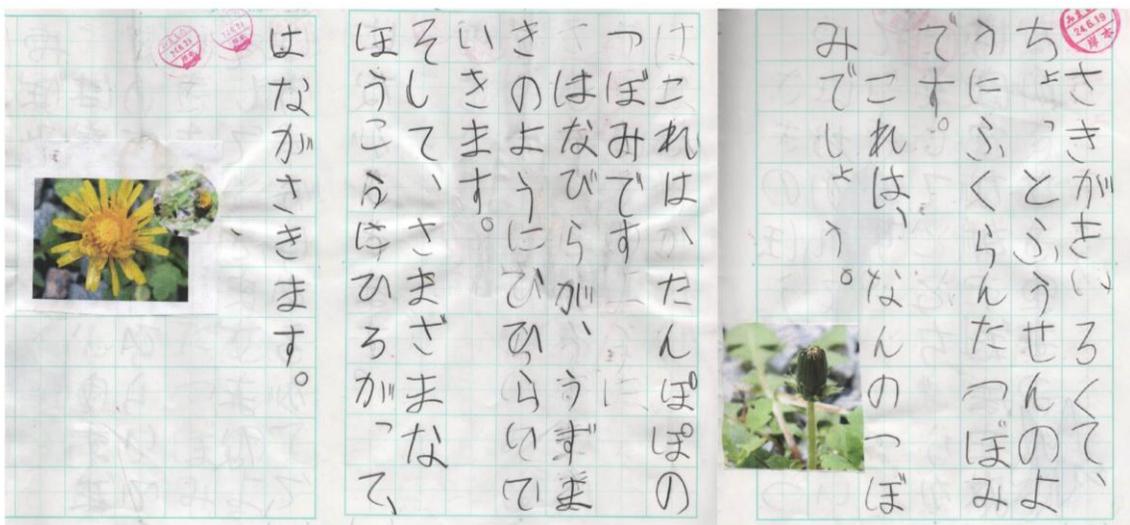
光村図書の国語教科書では、1学期には

「つぼみ」があります。2学期は「うみのかくれんぼ」と「じどう車くらべ」、そして3学期には「どうぶつの赤ちゃん」です。教育出版社は光村と同じ配列で、4つの説明文があります。東京書籍では、1学期に2つ「さとうとしお」「どうやってみまもるのかな」で、2学期と3学期は1つずつです。

この説明文をどう扱うのかは、1年生担任の大きな課題です。

1学期の指導「つぼみ」

下の写真は、教科書に出ている、はす、あさがお、ききょうのつぼみについて、まとめた後で、クラス全員で話し合っ「たんぼぼ」のつぼみについて、まとめたものです。1学期は、全員でひとつのものを書き上げることで、説明文を書くことへの負担感を軽くしています。



「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長 岡本 美穂

今年是一年生を担当しています。36人単学級です。事務的な仕事を一人で行わなければならぬ大変さもありますが、目の前の子どもの様子を見て、取り組むべきことを、自分で考えてできるのがありがたいなと思っています。

■学力づくり

一人ひとりの子どもたちが学力をつけていく過程、例えば授業の中で何かできることができるようになった時に学級みんなが喜び合ったり、やるようになったことを学級のみんなで喜びにする。そして、その喜びを分かち合う時間を「褒美」にしているというところ。みんなが喜び合っているという「褒美」。

学力研の講座で志水廣先生のお話を聞いて以来、実践を続けているのが「読み上げ計算」です。今週より一年生でも行っています。

す。時計や長さ、水のかさ、単位など、計算以外の内容も充実していて、繰り返し練習することで習熟できるような仕組みになっています。問題に答えるだけでなく、ペアで答えがあっているかチェックすることも大事なポイントです。「できた」という経験、そしてそれをもとに「わかった」という実感が生まれます。

・計算チャレンジは自分の成長
・読み上げ計算は友達の成長

昨日と比べて喜び合ったり。だから、自分に向き合った「計算チャレンジ」。友達の頑張りに向き合った読み上げ計算と区別して取り組んでいます。

参考資料

算数力がみるみるアップ！パワーアップ読み上げ計算ワークシート 1・2年

明治図書出版志水廣（著）編集、篠崎 富美子（著）

■授業づくり

「おたずね」ですすむ「授業づくり」

一〇以上前に行われた有田和正氏の学力研での講座の際に、「はてな」の重要性を学びました。だからこそ、一年生に入学したばかりの子どもたちは、無意識のうちにもいろいろなものに「はてな？」と思っているの、できるだけ早い時期に「はてな？」精神を引き出し、問題を発見する技能を育ていくことが大切だと考えました。

今年度も入学した次の日から、「それでは、おたずねはありませんかと、私が問いかけ、伝えるようにしています。その際は、意見を言う子どもも多いが、どんなことを言ってもよい雰囲気をつくりながら伝えることも最初に意識しました。毎日行い、例えば「消防車見字子でもほとんどの子どもが「おたずね」を消防士に投げかける姿が見られました。そのつながりで、授業も挿絵などや気がついたこと、気になることをみんなに伝える姿が毎日見られます。

■ウェルビーイングの学級づくり

〜ありがとうの言葉が変える〜

「ウェルビーイング」を理解し、整理する」
と、幸せになる「学級集団づくり」について説明を求め、JYを求めたJYと考へていきます。

<https://www.mext.go.jp/kaisiryo/content/000177757.pdf>

- ▼ ウェルビーイング学級づくりの観点
- 心理的安全性の確保
- ▼ 失敗しても安心できる雰囲気
- ▼ 意見や気持ちを自由に表現できる場
- 人とのつながり(関係性の豊かさ)
- ▼ 友達や先生との信頼関係
- ▼ 思いやりや協力を重視する文化
- 自己肯定感と成長実感
- ▼ 自分の良さを認めてもらう経験
- ▼ 「できた」「役立った」という達成感
- 意味・目的の共有
- ▼ 学級目標を子ども達と一緒に考える
- ▼ 「なぜ学ぶのか」「なぜ活動するのか」を話し合う
- 心身の健康
- ▼ 生活リズム、運動、休息の大切さを学ぶ

▼ 感情を整えるスキル(呼吸法・マインドフルネスなど)

(Chat GPTでJYのよう説明されてしまった)

私が大事にしたいポイントは、

・共感的なつながりを大切に

・当事者意識

・教室が集まりたい場所となっているか？と自問自答する。

感謝を伝えるJYで、伝えられる側と伝える側

の両方に

心理的効果がある

そうです。

・承認感

・散

感謝は

伝染、拡

散する。

これを学級づ

ウェルビーイングの深化

- ・今が楽しい (個人・現在)
- ・これからの将来に希望を持てる (個人・将来展望)
- ・クラスや地域の人の幸せを願う (社会・共生)
- ・この町・学校・世界を良くしていきたい (利他性・公共・持続)

ウェルビーイングの深化



くりの土台になっています。

■意識づけJYJY

・学が楽しく子どもたちが感じられるようにしたい。

↓ひらがなを学んでから「書く」機会をたくさん増やそう。

↓「へアで言います」などと、伝えあう力につながる言葉が出てきたら、短冊にして掲示しよう。

↓挿絵でも、なんでも気づいたことは言うてOK

・振り返りほどの教材でも取り組んでいる
↓今は、子どもが言ったことを担任が板書しよう。

・宿題などについてねいに取り組む。

↓休み時間などにするのでなく、子どもが「やってみかた」と思えるように。

・優しい言葉を使う。

・先生との合言葉↓「言ってもいいですか」と自分たちで聞く雰囲気を作っている

↓「いいですか」などと、自分たちで反応できるようにしてきた。

最悪な状況を乗り切るために

極寒の雪山で遭難したとき

『星の王子さま』を書いたアントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリは、一九〇〇年にフランス・リヨンの伯爵家の長男として生まれる。(その三年後に、ライト兄弟が初飛行に成功する。)

一九二二年、12歳のサン＝テグジュペリは、初めて飛行機に乗る。近くの飛行場に何度も通っていたら乗せてもらえたのだ。

一九一四年、第一次世界大戦が起こる。

一九二一年、21歳の時に、兵役で飛行士を志願するが地上勤務になるも、自費で民間の飛行免許を取得する。(伯爵家長男だからお金があったのだろう。)

飛行機は、第一次世界大戦で大活躍する。その大戦も終わると、使われなくなった飛行機(戦闘機)を郵便航空機として使うようになつたのである。

一九二六年、サン＝テグジュペリはラテコエール郵便航空会社に採用され、ついに

飛行機乗りとなつたのである。

サン＝テグジュペリが『星の王子さま』を出版したのが一九四三年、その四年前の一九三九年に『人間の大地』を書いている。そこには、航空会社で働く飛行機乗りの生き様が書かれているのである。

この本の中に、アンデス山脈・大西洋の空路開拓に大きく貢献したアンリ・ギヨメ(サン＝テグジュペリの先輩)のことが紹介されている。

そのギヨメが、南米のアンデス山脈を飛行中に不時着、極寒の雪山で遭難したのだ。しかし、ギヨメは奇跡的な生還をした。

再会したギヨメは、次のように語つたそうである。

「誓つてもいい、ぼくがやったことは、これまでどんな動物にもできなかったことだ」

ギヨメは、極寒のアンデス山脈に不時着し、嵐が過ぎ去るのを待って、二日目に歩き始めた。

「雪の中では」とわたしに語ってくれた。「すべての自己保存本能が失われる。二日、三日、四日と歩いたあと、望むのはもう眠ることだけさ。

眠りたかった。でも自分に言い聞かせた。妻は、ぼくがまだ生きてっていると信じているだろう。

とすれば妻は、ぼくが歩き続けていると信じているだろう。

仲間たちも、歩き続けていると信じているだろう。

みんなが信頼してくれている。だから歩くのをやめれば、ぼくはろくでなしということになる。」

しかし、満身創痍のギヨメもついに気力がつきていく。

「世界と和解するためには、瞳を閉じさえすればよかった。

世界から岩や氷や雪を消すためには。

だが意識の奥底から申し訳なさが湧いてきた。

妻のことを考えたんだ。

保険証書があるから、生活に困ることはないだろう。

そう、でも保険というのは……」

ここでギヨメは、さらに一步突っ込んで考えていく。

「行方不明の場合、法律上の死は四年間延期される。

その事実がまざまざと浮かび上がり、ほかの映像を消し去った。」

例え死んだとしても、人々が見つげられるところまで行かなくては、と考え、ギヨメは歩き続け、奇跡的に助かったのだ。サンIIテグジュペリは、このギヨメの行動について、次のように書く。

彼の偉大さとは、自分に責任があると感じることだ。

自分自身に対して、郵便物に対して、望みを捨てない仲間たちに対しての責任。

彼らの苦しみや喜びをギヨメは手中に握っている。

自らの職務に応じて、彼は人類の運命に多少なりとも責任があるのだ。

ギヨメの責任感が彼の生還につながっている、ということだろう。

ギヨメは、絶望的な状況の中でも、とにかく考えたのである。

そして、歩き続け、自分が歩き続けなければいけない理由や責任も考え出したのである。

自分の行動を考えることで決めて実行する、そこがすごいのだ。

選択させる。「今日の月は？」

六年理科「月と太陽の形」の第一時は、「月について知ってること」の発表。

第二時、八つの月の形のカードを順ではなくバラバラに貼っておいた。

ノートに日付や室温などを書かせた後、「今日の月に近いのは、どれでしょう。班で相談して決めましょう。」と、予想させた。

「だいたいどの班が満月になる数日前の月か、満月から数日後の月を選んだ。班とは

別に個人での予想にも手を挙げさせた。

昨日は、月齢19日の月だったので、正解は満月から数日後の右が欠けた月となる。

その月を「1」と板書した後に貼り、その左横に間隔を空けながら、「2」〜「8」の番号を書き、次の問いを出した。

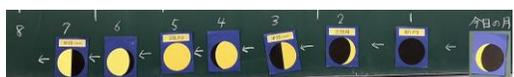
「この後、月の形がどう変わっていくかを予想しましょう。」

これも相談させ、班から一人ずつ交代で前に次の月を貼らせていった。これは、は、全班が正解した。やってない班が二つあったので、一つの班の子には「8」の次の月はどれかを選ばせた。(今日の月に戻ることを確認である。)

もう一つの班の子には、八枚の月カードをはずして、バラバラにし、全てを正しい順に貼りなおすようにいったのである。悩んでできない子がいれば、その子の班の子を全員呼び、班で協力して貼らせるのだ。

さて、単元の終わりには、今日の月をノートに書かせて、個人で持ってこさせて、私が判定をする。

考えて決めさせることが、大事なのだ。



社会科における知識とは

学力研常任委員 深沢 英雄

一、社会を学ぶ時

先生のための学校校長、久保齋氏がピラの中でこう述べています

「3年生では、数え歌て市の地図を覚えさせる実践、4年ではゴミ処理を自然のリサイクルで、5年では知識のネットワークを広げる「〇〇の旅」と社会科満点大作戦6年では予習による授業と、歴史学習で教室文化を知的に広げる歴史新聞実践などいろいろやってきた、子どもの本能と発達に則った社会科授業をやってきた。社会科は覚えなければ面白くないと語り、響感をかっている。」

社会は主要科目のうち、覚えたい知識がもつとも得点に反映されやすい科目です。暗記はもつともシンプルな勉強法です。覚えたい文法や公式を応用する必要はなく、記憶した知識そのものが得点につながります。歴史の年号や人名、地理の国名など、覚え

なくてはいけないことはたくさんありますが、効率的に暗記をすれば短期間で得点アップが狙えます。ただし、暗記科目では「正確さ」がとても重要です。うろ覚えの知識では得点を取れません。暗記科目を制覇するうえで、「知識の量×正確さ」がポイントになります。

小学校の社会科で学ぶべき知識は多岐にわたりますが、ただ暗記するだけでなく、社会の仕組みを理解し、より良い社会にするための思考力や判断力を養うことにつながるものが重要です。そのためにも、知識の量と正確さが土台となります。知識と思考力・判断力は対立するものではないと考えます。

二、社会で学年ごとに定着させたいこと

小学校の社会科では、学年が上がるにつれて学習範囲が身近な生活から世界へと広がっていきます。

3年生から社会科の授業が始まります。主に自分たちが住む市区町村の地理や産業、公共サービスの仕組みについて学びます。4年生では都道府県の名称や位置、特色などを学びます。

5年生では日本の地理、産業、環境問題などを学習します。

6年生になると日本の歴史と公民（政治・経済の仕組み）、そして世界の中の日本の役割について学びます。

学力研（当時は落ち研）では、読み書き計算を中心に、小学校の各学年で身につけさせたい内容を会員のメンバーで論議したことがあります。

「学力二十の指標」として杉浦和彦氏が提案されました。

社会科についても指標が出されました。

⑬ 地図の上で東西南北をたどり、簡単な略図を描いて道案内ができる。

⑭ 日本列島のおおよその形を描き、都道府県の位置がわかる。

⑮ 代表的な世界の国々の位置が予想できるとあります。

杉浦氏は、⑬について、「自分の行動を

意識化し行動の自立を支える力にもなる」といい、地図記号を使いながら目的地を示すことができるようにしておきたいものだと述べています。

⑰については、「社会で 起きる事象の思考・判断の支えになる」

都道府県名と位置を知っていることは、ニュースなどの情報を取り入れ理解を深める前提条件だと言います。

⑱では、小学校は、日本と歴史や経済面でも関係の深い国、数か国程度と考えていました。

岸本裕史氏は、学校で育てるみえない学力として、

『社会科・時事ニュースの紹介、地図・地球儀の常掲、話題のグローバル性とローカル性、地名・人名・外来語の日常化、歴史や地理の書物の推奨、社寺・史跡・博物館の見学、農作実習』をあげています。

落ち研・学力研の実践としては次のようなものがあります。

山口の大達和彦氏の「社会科おもしろカルタ&クイズカード」があります。都道府県カルタとクイズ、歴史人物カルタ・地図

記号・世界の国旗カルタです。

都道府県や県庁所在地の視写、日本国憲法前文の視写実践もありました。

図書啓展氏の「かつとばせー都道府県」

根無信行氏の「市町村のうた」「社会科スリーヒントクイズ」などの実践もあります。

暗記というとり返しで楽しくないというと感じられがちですが、学力実践は、クイズ形式のドリル・カルタ・音楽的な要素も使って、楽しく理解と習熟を進めてきました。

二、社会科の知識と技能の活用

社会科では、学んだ知識をベースに、さまざまな事柄について情報を集め、考え、まとめる「調べ学習」が重視されます。客観的な事実と主観を区別し、根拠を示して自分の考えを表現する力も養います。

社会の出来事やニュースに興味を持ち、なぜそうなっているのか、どうすればもっと

と良くなるのかを考える姿勢が重要です。公民としての資質、つまり社会の中で生きる人間として、問題に直面した際に情報を活用して解決していく土台を築きます。歴史や社会に関する事実的知識（戦争の経緯

や記念日など）は「考える」ための材料になります。例えば八月六日、九日、十五日を知らなければ平和や戦争の意味について考える入口自体がなくなってしまう。

原爆投下の事実を知ったうえで、「なぜ日本は戦争を続けたのか」「核兵器をなくすために何ができるのか」を議論する土俵が生まれます。

知識がなければ批判的思考や探究も空論になりやすいと思います。「歴史の知識を知らないこと」で「これは、こうだった。」と言い切られると簡単に騙されてしまうことも起こるのではないのでしょうか。フエイクニュースや情報を批判的に読み解き、対話を通じて合意をつくる力を育てることが必須です。世界の主要な出来事と日本との関係やいつどういう出来事が起こったのかをおさえる。そのうえで知識をどう生かすかを探究や対話で考える。

基礎的知識の欠如は民主主義の担い手を育てる教育にとって大きなリスクです。社会科は、土台としての知識+考える力の両立をめざすべきであり、どちらか一方に偏ることがないように実践したいものです。

学力研 第19期 先生のための学校・一回目 報告

荒井 賢一（大阪教育サークルはやし代表）

第19期の学力研・先生のための学校が、今年もスタートしました。

マンネリ打破のために、「今回は、学力研きつての理論家、実践家と「先生のための学校」学校長久保齋が激突する二つの講座を通して、「初等普通教育における算数科とは何か、国語科とは何か。社会科の学力とは何か、理科教育で育てる学力とは何か」を二人のバトルの中から学んでもらう。」ことになりました。

【9月13日（土）算数科「初等普通教育の算数とは何か、どう教えるか」】

【講演1】岡本美穂

子どもの困り感に寄り添うのが教師。公文は、一人ひとりが違う内容に、個人で取り組む。（現在の自由進度学習に似ている。）学力づくりを根底にした学級では、同じ内容をみんなを取り組んでいく。算数で、たし算を学ぶとは、「たし算の式を「言葉」を学ぶ時間と捉える」。

最初に何個あり、次に何個を増え、その次に何個増えたのか。（太字が重要。）

「8こと3こをあわせると11こになりまして。」を8+3=11と書くのが、算数。

それゆえ、すぐ式ではなく、自分の考えを言葉でノートに書くことが、大切。

（参加者の感想）

算数の学習を言葉で学ぶ時間ととらえる視点が新鮮でした。無自覚的に自分もやっていることだとは思いますが、自覚的に実践する必要性を感じました。

【講演2】久保齋

学力の格差があるのははっきりしている。昔の先生は、できない子を残して指導していた。大原則は、躓いている所まで戻って、レンガが積んでいくこと。

教師は、子どもたちに学力をつけることで、親の信頼を得る。

自由進度学習は、いわゆるメダカの学校。

誰が生徒か先生か分からない。

学力をつけるには、スズメの学校であるべき（鞭は必要ないが）。同じことをくり返すことで習熟させていく。

文章問題は、独自の努力がいる。先生の独自問題で演算決定をさせていく。

（参加者の感想）

学力格差を縮めるために底上げをし子どもに学力をつけることが大切。計算を確実にできるようにすることが授業のやる気につながる。今3年生で100マスをしている。九九がまだ確実でない子が2, 3人いてる。3週間やって、やつと100マスをうめることができました。わり算からあまりのあるわり算、やはり九九は絶対に覚えておかなければと改めて感じた。そして文章題で先問や創作類似問題は、子どもたちはとても喜ぶので、来週から実践していきます！

【困ったことなんでも相談会】

参加者の実践上の悩みに講師の先生や参加者の皆さんが答えてくれました。

※10月は、国語科「読む力、書く力 国語の基礎力をどう育成していくのか」がテーマ。

岡本だより 10月

◇学力研最新情報 岸本ひとみ

●来夏全国フォーラムの企画

もう？と驚かれるかもしれませんが、今は来夏の全国フォーラムの企画をどうするかを検討しています。

①記念講演講師の確定

②日程の確定

③会場予約

の順で進めています。たいていの施設は、半年前とか、10カ月前予約が普通だからです。

●記念講演者は

新井紀子さん！

新井さんの著書「A

I v.s. 教科書が読めない子どもたち」を読まれた方も多いと思います。下の最新刊もおすすめです。お話の中に、学力研実践に対する示唆や、AIとのつき合い方などのヒントも示して下さいさることと思います。

●2026年8月1日(土)

エルおおさかにて

そして、会場は、今年の全国フォーラムと同じ、エルおおさかです。新井紀子さん来阪で、申込が多くなることと予想しています。事前入金申込制にするかどうかを今検討中です。最新情報を読まれた方、この日程を開けておいて下さい。

学校の年間行事予定は、年明けには出ます。また、4月の新年度スタートにも確認をしていただき、早めに予定に入れて下さい。

新井紀子

学力と人生を決める もうひとつの読み方

48万 [AI・教科書が読めない子どもたち] 待望の解決編!

50万人のデータによる 衝撃の発見!

新編では教えない! 国語や読書では身につかない! 学び直して大人も失敗! 読者のリアルな声をつまみず!

小学館出版

◇事務局だより 岡本 美穂
●第19期先生のための学校

10月11日(土)

早速お申し込みいただいている方のコメントです。

第1回に参加し、早速言葉を大切にした算数の授業に取り組んでいます。第2回目も期待しています。

国語科

■講演①

「読む力、書く力 国語の基礎力をどう育成していくのか」

講師 鈴木 基久

「リズム漢字」「読み上げ漢字」

「かたかなプリント」などを考案

語彙を増やすための方法やすらすら読めない子の支援について研究中。子どもの伸ばすための教材開発に情熱を注いでいる。教材開発の足跡も語ってもらおう。

著書 リズムでおぼえる漢字学習 小学校全学年 (清風堂)

■講演②

講師 久保 齋 先生のための学校校長

漢字の習得は学力的自立の土台と位置づけ「漢字かるた」「つぶやき漢字ドリル」を考案、音読は文字言語と音声言語の架け橋と位置づけ「すべての教科での音読」「ベル音読」「文法に則った息遣い音読」などの音読指導を開発している。

著書 「つぶやき漢字ドリル」全学年 (小学館)

■講演1-2より議論

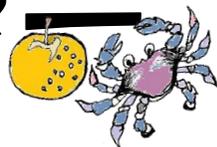
■困った「J」なんでも相談会
<https://www.kokuchupro.com/event/5ef53affd7c1e06e2993cd1f70462288/>

現場は厳しい、しかし、教師の創意工夫とその哲学によって子どもたちの学力をもっともつと高め、自治意識に満ちたクラスをつくれるはずだ!!

「学力づくりで学級づくり、授業でクラスづくり」を力説する学力研の哲学を学んでいただくう!!!

この思いで運営しています。参加お待ちしております。

学力研カレンダー



《各地のサークル・部会 2025年 10月 例会、イベント》

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしております。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

10/

- | | | | | | |
|----|-----|-------------|-----------|-----------------|---------------------------|
| 18 | (土) | みなみ学力研 | 9時45分～12時 | 阿倍野区民センター | 図書 nobu580701@yahoo.co.jp |
| 24 | (金) | 春日井学力研 | 18時半～ | レディヤン春日井(JR勝川駅) | 山口 080-6904-1697 |
| 25 | (土) | 大阪教育サークルはやし | 午後 | エルおおさか | 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp |
| 24 | (金) | 伊丹学力研 | 18時半～ | ※阪急武庫之荘駅近く | 前田 090-9715-3830 |
| | (金) | いろえんぴつ(加印) | 18時半～ | なんなん広場会議室 | 岸本 090-9117-6330 |

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等のご連絡下さい。

- 持ち方書き方研究会 ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を 前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等 今後の予定》

● 学力研・先生のための学校【全6回】

9月13日(土) 13時半～16時45分【済】 10月11日(土) 13時半～16時45分
11月 8日(土) 13時半～16時45分

2025年

1月17日(土) 13時半～16時45分 2月14日(土) 13時半～16時45分

● 1年生講座 第8回 10月25日(土) オンライン

(詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで)

(講師派遣希望、サークル情報などは 事務局へ 079-426-5133)

※今回の特集は「難教材への向き合い方・教え方」です。難教材であっても、どの子も伸ばすことができるか、それが問われますね。(荒井)

ご意見・ご感想は下記まで

荒井 賢一	E-mail aik28501@bca.bai.ne.jp
李 詩愛	E-mail iwamotoshie@gmail.com
堀井 克也	E-mail katsuya4k1h9@gmail.com
加藤 英介	E-mail hgrtd533@yahoo.co.jp